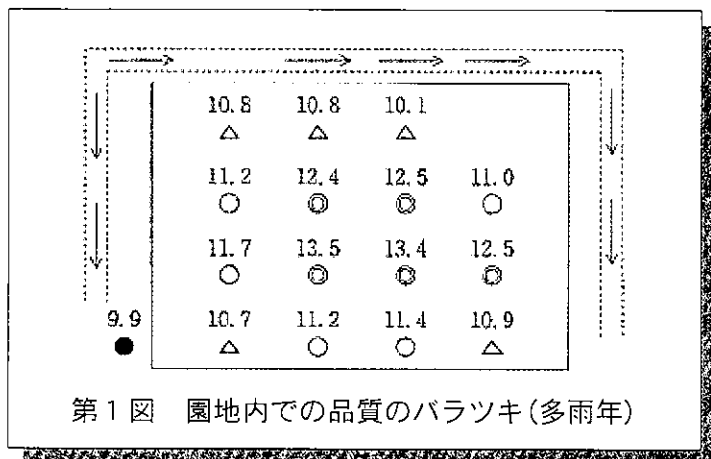


収穫まで待ったなし!!

# マルチミカンの仕上げ管理

佐賀県果樹試験場常緑果樹研究担当特別研究員 池田 繁成



第1図 園地内での品質のバラツキ(多雨年)

今月中には早熟系早生温州の収穫も始まります。本年は裏年傾向で全体的に着果量が少なく、園地や樹ごとのバラツキも多いなど品質向上を図る上では難しい条件ですが、収穫までの仕上げ管理を適期に行い少しでもブランド果率の向上を図りましょう。

また、来年は着花過多となる可能性が極めて高いため、樹勢向上や新梢確保を意識した管理も行っていく必要があります。

## 被覆状況のチェックを

降雨を遮断し土壌を乾燥させて糖度上昇を図るため、マルチの隙間や破損部分から雨水が浸入するような

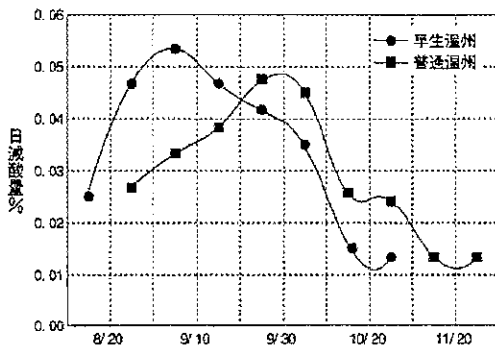
状態ではマルチの効果も出にくくなります。マルチを行って大部分の土壌が乾燥状態であっても、樹冠下面積の一割程度が濡れてしまうと樹体に十分な乾燥ストレスが掛からず品質向上効果が得られにくいと言われています。

このため樹幹周辺やマルチの接合部分などは特に注意してチェックを行い、必ず完全被覆となるようにしてください。また園地外からの雨水の流入も、品質のばらつきの原因となります(第一図)。園地の中でも土壌が乾きにくい場所では、廃ビニル等を活用してより広い範囲でのマルチ被覆を行うことも必要となります。

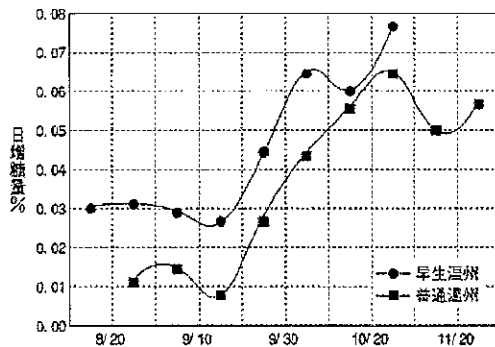
○品質調査による現状の把握  
通常はマルチの効果は被覆後一ヶ

第1表 マルチ栽培における時期別の品質目標

	極早生		早 生		普 通	
	糖度	酸度	糖度	酸度	糖度	酸度
9月1日	9.5~10.0	2.50>	9.0~9.5	2.80	9.5	3.50>
10月1日	11.0	1.00	10.0~10.5	1.50>	10.5~11.0	2.50>
11月1日	-	-	12.0	1.00	11.5~12.0	1.50>
12月1日	-	-	-	-	13.0	1.00



第2図 時期別の日増糖量の推移 (佐賀果樹試)



第3図 時期別の日減酸量の推移 (佐賀果樹試)

月から一ヶ月半後に現れてきますが、被覆時の土壌水分や園地の土壌条件、着果量や被覆後の気象の推移によって増糖効果には差があります。今後なるべく多くの果実をブランド果に仕上げていくためには、現在のマルチの効果把握しておく必要があります。

園地ごとの品質調査は八月中に実施されていることと思いますが、今月も同様に品質調査を実施します。九月上旬における糖度の目安は、早

熟系早生で九・五〜一〇度、早生・普通温州で九〜九・五度です(第一表)。マルチの効果は十分であるかどうか、なるべく早く確認することが重要です。また収穫期まで定期的に実施していく必要があります。

○増糖対策  
品質調査の結果で目標とする糖度に達していない場合は、晴天時にマルチを開放して土壌乾燥を促進して少しでも樹体に水分ストレスがかか

るようにします。労力的に大変な作業ですが、早く行うほど効果は高くなります。また着果負担が少ないと品質向上効果が現れにくくなります。よって着果量が少なめの樹では、商品性の低い極大果や傷果でも正常果の肥大に影響なければ摘果せずに残しておくようにします。これにより秋芽の発生を少なくする効果も期待でき、秋芽の多発生による品質低下を防止することにもつながります。

○減酸対策  
糖度は目標以上に達しているが酸高傾向にある園地では、かん水や葉水による減酸対策を実施する必要があります。減酸を進めるために効果的な時期としては、糖度への影響が少なく減酸量も多い八月下旬〜九月上旬が適しています(第二図、第三図)。ただし着色期以降は浮き皮果発生を助長する可能性がありますので、早めに対応を行って酸度を下げることが重要です。

かん水のポイントとしては一回に五〇ℓ/樹を目安に行いますが、一回に大量に行わず果実品質や樹の状態をチェックしながら数回に分けて実施してください。また水分ストレスが掛かると日中葉が巻いた状態になります。早朝に観察して葉が巻いている時は、かん水や葉水を行うタ



イミングです。葉水は日没前に行うと効果的であり、樹全体に葉から水が滴り落ちる程度に実施します。

### 収穫までの仕上げ管理

#### ○摘果および樹上選別

早熟系早生温州より順次、仕上げ摘果→樹上選別に移っていきます。着果量が充分であれば小玉果、傷果等の商品性の低い果実を中心に落としていきます。着果量が不足している樹では、増糖対策の項で述べたように品質向上のため必要最小限の摘

果にとどめます。

#### ○枝つり

特に高糖系温州や隔年交互結実栽培園では、果実の肥大にともなって枝が下垂し折れやすくなります。枝つりの実施により枝折れの防止を図るとともに、樹冠内部まで光が入ることで品質向上や着色促進が図られます。

#### ○果実腐敗の防止

品質重視の栽培は果実の過熟化にもつながりますので、以前と比べて果皮は傷みやすくなっており腐敗し

やすい条件にあると言えます。極力腐敗の出にくい条件で出荷まで管理を行います。

#### ◆果皮になるべく傷をつけない

腐敗の原因となる細菌は、果皮表面の傷口から侵入します。果実の扱いを丁寧にするともに、収穫カゴやコンテナの運搬の時にも注意してください。

#### ◆腐敗が起こりにくい条件で収穫する

収穫時に降雨があり果実が濡れていると、腐敗が助長されます。なる

べく果皮が乾いた状態で収穫するようにし、作業上やむを得ない場合でも雨が止み果面に水滴が付着していない状態で収穫します。

#### ◆的確な薬剤散布

樹全体、果実全体に薬液がムラ無く付着するように丁寧に散布します。ディस्कノズルの使用や適正な散布圧力での防除をお願いします。

### 来年に向けた今後の管理

摘果の項で述べましたが、品質向上を少しでも図るために、本年の着果管理は仕上げ摘果や樹上選別を中心に行う必要があります。加えて来年の新梢確保を行うためには、商品性が無い果実を、収穫終了後であっても一ヶ月まで樹上に結実させておくことも有効であると考えます。

また、着花のばらつきが大きく新梢が短く緑化が遅かったことなど、本年の樹相は樹勢や樹体栄養の低下を反映していると思われます。来月以降の管理になりますが、秋肥の施用や葉面散布、収穫後の水戻し、有機物や石灰資材の施用など出来る限りの対策を適期に行うことが、翌年の高品質果生産につながりますので計画的な対応をお願いします。

今年だけでなく、  
来年・再来年の高品質果  
生産に向けた管理に  
努めましょう。

